震災後論

【1】

変われるから希望を

瀬戸内寂聴さん

被災者が編んだショール

地方を犠牲にして成り立つ中央、人間より国家を優先する在り方、科学技術への過信…。東日本大震災で露呈した矛盾や問題点は、さらに深刻化しているようにもみえる。しかし今、私たちはそのことから目を背け始めてはいないか。多くの命を奪った震災から3年、日本の航路を危ぶむ6人に聞いた。

◇

この手編みのショール、いいでしょう？ すごく暖かいの。夜中に原稿を書いているときも、肩に掛けています。東日本大震災で被災した、飯舘村のおばあちゃんが編んでくれたんです。

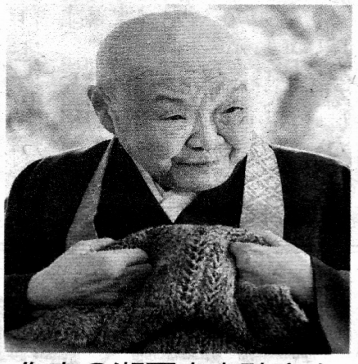
震災後、何度か被災地を訪ねました。お見舞いに行くとみんな喜んでくれましたが、あの年の秋の飯舘村だけは違った。誰もが顔をこわばらせていて、厳しい表情です。

それで「みんな疲れているわよね。私、小説よりあんまが上手なの」と、そこにいたおばあちゃんの肩をもんであげたのね。そうしたら場が和んで、みんながつらいことや政府に腹が立つことを口々に話しだして、毛糸をもらったから、あんまのお礼に」って。原発事故で村に住めなくなり、家族もバラバラな状況なのに。その優しさに心打たれました。

震災から3年がたち、政府は今、そういう人たちを放ったまま、東京五輪の開催決定で浮かれています。原発は汚染水を垂れ流し続けているのに、安倍晋三首相は「コントロールされている」と平気で言う。目の前に華やかなことがあれば国は治まっているようにみえると、震災のことを忘れさせようとしているのでしょうか。五輪を開催する余裕があるなら、避難生活で苦しんでいる人たちが戻れるようにすること、今いる環境を少しでも住みやすくすることが、政府のすべきことです。

人間は忘れるという能力が与えられているから、生きていける。忘れなければ生きていけないようなつらいこともある。でも、決して忘れてはならないこともある。それが震災です。原発事故です。「代受苦」という仏教の言葉があります。人間が、私たちがこうして生きていられるのは、震災で亡くなった人たちが代わりに苦しみを受けてくれたから。だからこそ、忘れてはいけない。

以前、津波で行方不明になった後、遺体で見つかった人たちの名前を新聞で探し、ノートに書き写して私に送ってきた人がいました。「自分は被災しておらず、何の力もないけれど、せめてノートにその名前を書き続けるので、寂聴さん、祈ってください」と。人間はすごい、と感動しました。人間も、ものも、すべては変わっていきます。今の世の中が悪くても、変われると思うから、私は希望を捨てられないのです。今年92歳になりますが、この不安で、危険な国を残しては死ねません。ちょっとでも良くし、「ここまでしかできなかったけど、ごめんね」と言って、子どもたちに手渡したいのです。



作家の瀬戸内寂聴さん＝京都市右京区の寂庵

せとうち・じゃくちょう 22年徳島市生まれ。近著に「爛」など。